

文学の中の東洋医学・民間療法

——伊藤桂一『寒い旅』論

小櫃暢太郎

一

「寒い旅」は一九六五年（昭和四〇年）九月に『小説新潮』に発表された伊藤桂一の小説である。作家である「ぼく」は三月上旬に、ある雑誌から、富士の裾野から箱根にかけての取材旅行を頼まれる。それは、有名な観光地が並んでいる裾野から箱根の間にある、「盲点のように、それほど知られていない」温泉場を探る取材であり、その記事の内容も「少々残寒があったとしても、ムリをして早春の旅情を楽しむ」ものにするようにと、編集側からの注文がつけられていた。「ぼく」は一年半ほど、全身の神経痛という身体の不調のために家に閉じこもりがちだったのだが、近頃身体の調子が良くなってきたことから「こころで気分転換をするのもいいではないか」と考える。そして、「ぼく」がその仕事を引き受けることよって、この小説は始まる。

「ぼく」は最初、取材についての編集部の注文を聞いた際に、富士の裾野の「早春の旅情」を「験に思い浮かべる」。当初、こ

の取材旅行には「早春」に触れるという目的設定がなされており、「ぼく」もその風景を期待しているということを、語り手はまず読者に提示しているのである。「ぼく」は裾野の残雪の状況を編集者に確認するが、その編集者の返事は「まあ大丈夫でしょう」という曖昧なものでしかなかった。しかし、「ぼく」は裾野の状況を捉えないままに取材の件を了承してしまう。それは東京に淡雪が降ってから半月以上経っているので残雪はほとんどない、という予想が「ぼく」の中にあつたからなのだが、しかし、「寒い旅」という題名と、取材を引き受ける段の最後に一言「思いのほかであつた。」とその旅が形容されることが予告するように、旅の過程は「ぼく」が当初思い描いた「早春の旅情を楽しむ」という予想に留まらないものになり、それによって「ぼく」は禍福が入り混じった「思いのほか」に、裾野で遭遇することになるのである。

「ぼく」はまず汽車に乗って箱根へと向かっていくのだが、小仏をすぎた辺りから、汽車の窓から見える風景が変容していく。裾野の方向に近づくにつれて積雪が目立つようになり「よほど工

夫しないと写真で早春の感じを出すのは難しいかもしれない」と思わせる。雪の世界が「ぼく」の眼前を覆ってしまうのだ。それでも汽車にいる内は良かったが、汽車を富士吉田で下り、〇温泉へと向かうバスを探す頃には周りの景色が「完全な雪景」になっており、「ぼく」は全身をゆっくり締め付けるような寒さを感じはじめた。そして、そのために、「ぼく」は軽快していたはずの神経痛がぶりかえしてしまふこととなる。

語り手である「ぼく」は、その時点で自分が寒さに弱いことを回想を交えて説明するのだが、その原因がこのように語られている点を紹介したい。

寒冷に弱いのは、体質のためなのかそれとも皮膚感覚の問題だけなのだろうか。あるいは栄養が原因かもしれないし、神経痛のためなのかもしれない。

ここで「ぼく」は自分の寒冷への弱さの原因を、何か一つに断定することができないでいるのである。「思いの外」の旅の中で寒さに遭遇し、これから旅程のいたる場面で特定の療法が存在しない症状に「ぼく」は困らされていく訳なのだが、そのことは早春の裾野の寒さを強調すると共に、この旅が何か一つに断定できない、予想できない、定まらない不確定なものと出会う旅である、という点を示しているともいえる。「ぼく」の旅はこの時点において、「早春の旅情を楽しむ」という楽観的な旅から、原因の分からない寒さと自分の身体の不調とに付き合っていく旅へと変貌してしまっているのである。しかし、そういった予想できない旅の過程の中で「ぼく」は寒さに困惑しつつも、様々な印象を抱き、また様々な想起や思考を展開していくこととなる。

二

山中湖方面の国道を左に曲がった道をしばらく進むと〇温泉の「鄙びた湯」があり、寒さに辟易しながら「ぼく」はそこに一泊し、その周囲を取材することになる。その旅館での顛末もまた、一つの印象に収まらないことを示す描写が、裾野の宿のエピソードの最初に配置されている。

案内してくれたのは緋のモンペを履いた、ほっぺたの紅い、女中さんとも娘さんともつかぬ女性だったが、愛想もいわず物怖じもせずそのくせ事務的でもなく、素朴のようにも不親切のようにもとれる妙な印象だったが、(中略)自分で説明するのが面倒なのか、それとも気をきかせてくれているのか、どちらともわからない。

応対に出た女性が、果たしてどういった印象を持つのか、「ぼく」は捉えかね、「妙な印象だった」と、判断を泳がせるのである。この女性が果たして「素朴」な人なのか、それとも「ぼく」にたいして「不親切」な人なのか、ここでは「ぼく」は価値判断を留保しているのだが、そういった女性に出迎えられて一日目の裾野の宿の取材はスタートすることになる。

まずこの土地の取材に行くことを決めた「ぼく」は、女中に「近所の名勝などもみたいから、様子をちよっと聞かせてもらえないか」と頼む。すると、弥八さんというタクシーの運転手を紹介される。ぼくはその応対に対して女中が「自分でするのが面倒なのか、それとも気をきかせてくれているのか、どちらともわか

らない。」と例によって思うものの、「出来るだけ早くこの寒い場所を発つてしま」いたいと考え、カメラ一つの軽装で、タクシートの運転手の勧めで陥没湖と鱒の養魚場を訪れることになる。バスの中では「白雪に彩られた壮麗な富士を仰ぎみる余裕もな」かった「ぼく」だったが、しかしこの取材で、裾野の風景を堪能することになる。

裾野の風景というのは、しかし、まことによるしかなかった。白樺をまじえた樹林帯に、二戸三戸と散らばる、雪をかぶった農家の趣もめずらしかつたし、これが陥没湖だといって車の停まったとき、目前にみた周囲三十メートルほどしかない透明な湖も、ぐるりが森閑とした雪景であるだけに、一段と目を惹いたのである。

湖の水が流れる水車が富士山を背景にしている姿を「芝居の書き割りでもこうはゆくまい」、「旅びとに、ほう、と息を呑み込ませるのを、先刻承知しているという按配なのだ」と、絶賛する。しかし、そこには当然「早春の気配などはみじんもなく」、「裾野が「早春の旅情」という取材の目的になつた場ではない、冬の景色が広がり行く場であるという描写が重ねられていく。

しかしそういつた冬の絶景を見ていつた「ぼく」は、次にその場の「名画的な構図」になっている湖水に目をむける。そして、その湧水を手を入れてみると、水にしびれるような冷たさがない、ということを通じていくのである。そこから「ぼく」は「水温の中に、春の気配はさぐれたのである。」と述べることで、「早春の旅情」を肌で感じ取つたことを読者に伝えているのだ。

ここでは、寒さと裾野の冬の景色が描写されており、その点が

ら題名通りこの旅が「寒い旅」と呼べるものになっているといえる。だが一方で、その寒さの中から「春」の気配を感じさせる描写へと繋げられており、「早春の旅情」を見出した旅とも解釈できるようなつていのである。つまりところ、裾野の「冬」と「春」との混在が、語りの流れの中で再現されているといえるのだ。そしてそれは、この旅館を立ち、裾野から箱根にむかう車中の場面においてもまた反復されることになる。

バスが籠坂を越えてゆくあいだの、次第に俯瞰を深める景観は、それが雪景であるだけにいつそう眼にしみて美しかつた。しばらくのあいだ、ぼくは身体の異常を忘れたほどである。(中略) みとれたまま時間を忘れたうちに、まもなくバスは下りにかかつて、ようやく、雪をもたない平地の風景が望見されてきた。峠は、下るにつれて微妙に春の気配に浸ってゆくかに見え、須走にいたると、雪は全く消えていた。

作者は、ことあるごとに旅の中で遭遇した寒さを強調するが、その一方で、その寒さの中にある春の気配や、冬の情景が春のそれへと移り変わっていく様を克明に描き出しているのだ。その意味において、「寒い旅」というテキストの中で最初設定された「残冬が残つていても、無理をして早春の旅情を楽しむ」という目的を達成しているように読者には受け取れる訳なのだが、一方で先に見てきたとおり、「ぼく」が寒さに弱くそれに対する恨みや風物に対しても感動する「ぼく」の姿などを見逃してはならないだろう。自身の感動や感覚をそのまま書き連ねていつているのが「ぼく」の語りであるように見えるが、その語りによって「寒

「旅」は、旅が当初の目的設定からはずれているようにも、達成されているようにも描かれており、読者に多様な解釈を投げかけているのである。言い換えれば、「ぼく」が感じた「早春の旅情」を、一通りのものとして読者に印象づけまいとする小説の仕掛けが、「ぼく」の語りの中で息づいているといえるのである。

そのような情景を堪能した後、宿に戻った「ぼく」は、温泉に入ったことよって部屋で「はじめてため息が出るほどくつろぐ」ことができるようになる。その際に、先の印象が定まらない女中がやってくる。

炬燵に入って一服つけたが、吸殻入もないので、炬燵の中に灰を落としてみると、先刻の娘さんが茶菓をもってあがってきた。菓子は峠の茶店みたいところによく売っている、ネジリンボウという駄菓子である。きつと黙って帰るだろうと思つて、こちらも黙つたまましていると

「旦那さん。いかがでしたか」

と、膝を突いたままできいてくるのである。なんでもないと、きに、「こつと笑うようにするのは、やはり純粋なのだろう。」

ここでは、女中に対する先の印象が、コミュニケーションを取っていく過程の中で、「やはり純粋なのだろう」と好感へと収束していく様子が描かれている。彼女は、「ぼく」の寒さについての実感を共有できない現地的人物であり、それ故に「ぼく」は寒さに困らされることになる訳なのだが、そういった「ぼく」の損得とは別に、過程の中から人の印象を捉えようとする「ぼく」の姿勢をここに読み取ることができるのである。

温泉に入つてくつろいでいた「ぼく」だったが、次第に部屋の

寒気に困るようになっていく。「いかにも冬の宿らしい粗末な」料理を無理をして食べた後、部屋の窓に隙間があいていることを発見する。その寒さに耐えるために、寝る前にもう一度湯に入るがあまり効果がなかった。仕方ないから部屋の中で、「ぼく」に自身の身体を「自分の力で解決しながら進んでいく」方法としてN先生から教わった体操法をしていくことになる。N先生とは健康法を「ぼく」に教えて、また「ぼく」の健康観に多大な影響を与えた人物なのだが、その人となりを回想しつつ、「ぼく」はなんとか布団に潜り込み、無理にでも寝ることにする。

その翌朝起きてすぐに「ぼく」は顔を洗おうとして裏の川に出ていき、好天で朝の陽ざしが「みるかぎりの雪景をまぶしく射ている」姿を見た「ぼく」は、昼頃には寒さが緩和してゆくだろうと推測する。顔を洗い終えた後、「なにかにぶつかると、身体がカチカチ鳴りそうな寒ささえ我慢すれば、この雪の裾野の澄冷をきわめた空気の味はなんともしえない」と、あれだけ辟易していた冬の空気を味わいつつ、「銀粉の微塵が舞い立つかとみえる」富士の姿を仰ぎ見た後、朝食を食べたら、宿を出る時分になっていた。そこで、この旅の感想を、「ぼく」はこう総括している。

自体この旅も、ある意味では身体の訓練のためであったのだし、故障が出れば自分で手当してゆくという、貴重な練習を積むためであった。

そして、宿泊代の千円を女中に払う際に、「寒さにいじめられたかと思うと、高いとも安いともいえない。」と「ぼく」は旅館についての感想を書き留めている。ここではまず、裾野の宿での宿泊の価値決定が「高いとも安いともいえない」という冒頭同様

の曖昧な対句によって保留されており、「春」と「冬」の旅情が混在していた旅が、「ぼく」にとつてその印象を確定させることがないものだったことが読者に示されている。そして、旅の目的もまた、「残冬が残っているも、無理をして早春の旅情を楽しむ」という当初設定されたものではなく「身体の訓練のため」「故障が出れば自分で手当してゆくという、貴重な練習を積むため」であると考えられるのだ。当初の目的の達成如何を曖昧に保留したまま、「ぼく」によって裾野での一泊の出来事が、「ある意味では」という言葉がついた別の目的を総括されること、そのことによつて、「ぼく」が旅で得た収穫は、その多様性を残したまま読者に届けられているのである。

語り手である「ぼく」は「〜でも〜でもない」といった曖昧さを演出する表現をこの旅の冒頭と終わりに配置しており、それによつて「ぼく」はこの裾野の旅を一つの目的意識や印象によつて捉えることを拒否しようとしている。そしてだからこそ、裾野の冬から春にかけての風物や景色のすばらしさが、それらが混在した形のまま、この小説の描写に刻印されているといえるのである。「寒い旅」の中で「ぼく」はカメラを手にしつつほとんど写真は撮らないが、カメラのシャッターが捉え切れない「冬」と「春」の混在が、「寒い旅」という小説の中で描かれており、その混在をそのまま読者に読ませるために、語りの中で様々な仕掛けが為されているといえるのである。

三

前章では一つの目的意識や印象にとらわれない語りが、読者に旅の多様な情景を伝えている点について論じた訳だが、それと並行して「ぼく」の思想が、回想という形式によつて語られている点について、今章では考えていきたい。

この小説において語り手である「ぼく」は、旅の旅情を語る一方で、多くの脈絡のない回想を交えていく。例えば裾野の宿の温泉に入り「四肢がのびのびとしてきた」時に「女性の編集者の眼」を思い出し、「ぼく」は男にも女にも少ない「澄んだ眼」の人物についての考察を語り出していく場面がある。その回想は「女性の眼の澄んでいることと、裾野の寒気にどういうつながりがあるのかぼくにはわからなかった」と閉じられるのだが、こういった連想によつて語りがそのまま自分が感じたことや考えたことを書き連ねるのが、この小説の構成の特徴のひとつとして挙げられる。そして、その回想とも連想ともつかない語りの中で中心的に描写されるのが、前述したN先生とそれに影響された「ぼく」自身の健康観についてである。

「ぼく」は旅の最初で「もし身体上における困難な事情に遭遇すれば、とにかくそれを自分の力で解決しながら進んでいく」という方法を、なにか教えられていた」と語っており、実際そういつた体操法が本文中でもいくつか実践され紹介されている。それを教えたのが、N先生と呼ばれる人物だ。N先生は、眼を澄むことについての、その次の回想で、「眼の澄む条件に恵まれている人」

として登場する。このテキストを読む限りでは整体師であろうと推測されるN先生は、最初の回想では「硬結」というものができると、それから四日目に人は死んでしまう、ということ。「ぼく」に教える人物として読者に紹介される。それを知ったとき、「ぼく」は、人間の身体が「驚くべき忠実さで、自身の生命を守っている」ことに気づき、「肉体それ自体の誠実な営為」に感動を覚えた、ということを語っていき、「ぼく」は今まで自身が肉体を軽視してきたこと、また「狭い知識とあいまいなよりどころだけで、ずいぶんと無益な投葉の歴史をくり返してきた」ことを、N先生の健康観に触れたとき反省したと「ぼく」は回想している。

「ぼく」は、自身の神経痛がこの先生の健康法によって軽快していったと語っており、「ぼく」の健康観は大きくこのN先生の影響を受けていることが伺える。今章では、その健康観がどのようなものであるか、また「ぼく」がN先生の健康観をどのように咀嚼しているかを、回想の場面を辿っていくことによって明らかにしていきたい。

裾野を離れ、御殿場へ着き、箱根へ向かうために「ぼく」はバスを乗り換える。そこで、遠くから「富士を遠望する御殿場一帯」が「パノラマ」の眼前に広がる光景に感動するのだが、そのときにふと、「ぼく」は戦時中の頃のことを思い出す。

戦時中、中国大陸で「その時の風土というものから、無言の説得を受けてきたような気がし」たと「ぼく」は回想し、それによって自分と「自国との風土の脈絡」といったものを再確認したとする「ぼく」は、そこから「八月十五日に戦争が終わらず、米軍が上陸してきて、日本軍ゲリラを掃蕩しながらこの箱根を越え

てき」で、富士の景観をみたら何と思うだろうかと考える。米軍の兵士達は富士から「観光的な驚嘆か感銘」しか見出さない、と仮定した「ぼく」は「これらの日本及び東洋に対する理解は、しよせん観光的な理解の域を越え得ないのではないか」、「風土の上で断絶しているということは意外にきびしい問題を蔵しているのではないか」といった思考を展開していく。ここから読み取れる「ぼく」の思想の傾向として、「ぼく」が中国と日本とが繋がりを感じているとする一方で、東洋と西洋、という二項対立の考えによって三国を捉えている、という点をまず第一に挙げられるだろう。そして、そういった東洋と西洋を腑分けする思考が、先の医療観と繋がりがるように見受けられる。先の回想で使用された「無益な投葉の歴史」という言葉からも分かるように、「ぼく」が西洋医学について懐疑的であるということが回想の節々でほのめかされているのである。

そして、それ以上に大事なものは、こういった作者の意識や考えが「一種の旅情につながるものとして、身に湧いてきた」ものとして語られている、という点だ。こういった作者の考えは、あくまで「寒い旅」の本筋や目的から遊離した、とりとめのない連想という形式で語られており、秩序立った理論として順序よく整理されている訳ではない。しかし、そういった語りが採用されることによって「ぼく」は、何かを一つのことを分析し、主張していく西洋的視点を回避しているといえるのである。それは、先に論じた目的設定とその多様化とも関連性があるといえるが、ともかくにも一見方向性が定まらないようにも見える「ぼく」の語りは、東洋医学に類するであろう整体師らしきN先生と、それに影

響を受けた自身の健康観を語る上で、戦略的なそれであることが伺えるのである。

箱根についた後、これで寒さに脅かされることはないと安心した「ぼく」は、二泊目の宿である箱根下湯のB楼という旅館に向かっていくことになる。その途中で、足を痛めた犬に遭遇する。

その犬の前足の治療をしようとして「ぼく」は考えるのだが、細君らしい人が赤ん坊をあやすためにその犬を呼んでいたのでやめにしてしまう。その時に、浜松で犬の喘息を治したことを回想していく。

浜松では喘息に苦しむ犬の喉に手を当てて、それによって喘息を治したと「ぼく」は回想している。手を当てた際に犬が全面的な信頼を寄せてきたので、「ぼく」はそこに無条件の了解、というのを読みとり感動したという。手を当てて、気を送ることによって犬の喘息を治したとする「ぼく」は、「無心な誠実な気をそそぎ、かつ「その対象が無心に救いを求めていれば」「お互いの伝達と感応は、弱まっている一方の生命の喚起をうながしはじめる」ものであると、その「N先生の触手法」を説明している。

この説明のリアリティの問題は置いておくとして、私が問題にしたいのは、このN先生の治療法を紹介し、実践の例をあげつつも、「ぼく」はこう結論つけている点である。

もともとぼくは魚を生き返らすときに、ひとつ困ったことを感じた。こうした心情に浸りきると、その魚を釣ったりすることができなくなる、ということであった。

どこかで線を引き眼をつぶらないと、ビルマの仏僧のように、全身を二百七十幾つの戒律で縛ってしまわなければな

らなくなる。ゆきとどいて考えながら、しかもそれにとらわれない、微妙な均衡のなかに、身を持って行かなければならないわけである。

N先生の治療法やその考えに触れつつも、そこに浸りきれば自身を戒律で縛ることになる。だからこそ、そのような健康観をふまえて考えを巡らせつつも、そこにとらわれてはいけなないと「ぼく」は思考を展開していく。「ぼく」が見出そうとしているのは、N先生の考えに共鳴しつつも、そこへと埋没はせずに自身の視点によって物事を捉えようとする姿勢なのである。そして、ひとつの考えにとらわれることなく、「微妙な均衡」を保ちつつ、自身が思考を巡らす、そういった思考術を語るためにとられた手法こそが、一見すると脈絡がないかのように偽装された「ぼく」の語りだった、といえないだろうか。そして、その語りの中で重要視されているのが「人間を含めた生物」が「相関関係において、支えあうようにできているらしい」という、自己と他の生物との関係性であることは示唆的だ。その語りの中で最後回想されるのが、浜松での友人との議論である。

浜松に泊まった時、夜が更けるまで友人と健康論を議論することになった「ぼく」は、「生命それ自身から出発した整体論で、西洋医学を弥縫的な対症療法以上に評価することは誤りだ」と友人に説明する。そして、年中病気の人、「つねに病みながら身体を調整しつづけている人間」のほうに、大患を避けて生命をおびやかされる心配が少ないという持論を述べていく。そして、だから病気に対する精神的なバランスさえ失わなければ、友人の病気がちな細君は、友人より長生きするかもしれない、と「ぼく」は

独自の理論を展開するのである。それは、細君が弱くて困る、と友人が患痴るのを「ぼく」が慰めようとするところからはじめた訳だが、その友人は「ぼく」の健康観について「理論では納得できても、実感として受けとれないらしかつた」様子で、その理論自体が友人の心に収められてはいないことは留意しておきたい。そして、その議論を進めていく内に、「話がなんとなくむつかしくなつて」いつてしまい、その議論は「しまいに脱線していつたりして、曖昧のままに終わり、次回の結論を約した」と、結論が出ないまま打ち切られることになる。その次回の議論とそこへ出た結論は本文には書いておらず、「ぼく」は「それによって、細君の虚弱を擁護し彼を慰め得たことだけはたしかであった。」と回想を閉じている。

この最後の回想では、今までほのめかされていた「ぼく」の西洋医学に対する批判的な視線が明確に盛り込まれ、筆者の生命観や健康観がいに理論として語られることになる。しかし、問題なのは、その議論が「脱線していつたり、曖昧なまま終わっ」しまふことにあるだろう。ここでは、その議論の結論は宙づりになり、友人に「ぼく」の健康観は完全には伝達されていない。しかしながら「ぼく」は友人が「ぼく」の健康観を実感として納得しなかつたこと以上に、「脱線し、曖昧のまま」終わつたはずの議論の過程の中で妻の病弱さを嘆く友人を慰め得た、その利を得たことを最重要視しているのである。この、議論の内容部分や結論以上に、それによって友人とどういった感情のやりとりをしたのかを重視する「ぼく」の姿勢は、そのまま、「ぼく」の健康観、一つの症状に対して療法、つまり結論を出そうとする西洋医学よ

りも、生命全体を捉えようとする東洋医学を重視する姿勢とに重なり合うだろう。この小説において、回想という枠組みの中で東洋医学に近い「ぼく」の健康観が断片的に語られてきた訳だが、その語りが断片的であるが故に、彼の健康観は秩序立てて結論がつく形では語られてはいないことは先に論じた。そして、それだからこそ「ぼく」は、逆説的に生命全体とその多様性を、一つの理論において規定してしまうことなく捉えようとする自身の健康観を語る事が可能だったのである。ここでは、理論の伝達や健康観の議論の結末よりも、友人と議論したことそれ自体や、そこで彼とその細君を支えあうような話をしたこと、その過程自体が重要視されており、つまるところそれは実践として健康観の重要視に他ならないのである。また、作者自身がその理論に沿う形で寒さと身体の不調をいなしてきたことから明らかな通り、「生きる上で有用の具」としての思想や理論が、実践をふまえて読者に紹介されていると捉えることが可能だろう。回想という非脈絡的な語りの中で「ぼく」は自身の健康観を語っていく訳だが、それによってそこに「とらわれる」、つまりそれが一面的に正しいものだと読者に押しつけることなく、「理論」だけではなく人ととの繋がりの中で醸成された「実感」を持った考えとして読者に伝えようと、語り手である「ぼく」はしているといえるだろう。

その回想の後、「ぼく」は箱根の宿の豪華な食事が空腹であるはずなのに受け付けない、という身体の症状に出くわす。そして膳を下げた直後から空腹になりはじめてしまい、「どうしてこういうことになるのか分からない」と自分の身体の声にたいして、「ぼく」はそれを理論化できずに戸惑うことになる。しかし、売

店もなかったもので、「ぼく」は食事をあきらめて、N先生から教わった体操をしつつ、旅を思い出ししていく。「変化のある面白い旅だった」と述べた後、犬のことを回想する。明日の朝、もし犬が昨日と同じ場所にいたら、夕膳の残りを残りをやり、足の傷を握ってやるというお節介をやりたい、と寝る前に考える。そして、この小説を「自分の生き方の上で、いい意味で、脇道にそれるようなことを、できるだけして行きたかった。」という結語で終わらせている。ここでの「脇道にそれる」という言葉は先の「脱線する」という言葉と親和性をもったもののように受け取れるが、それは何かを一面で規定せずに、その時々を感じたことや考えたことを拾い上げるためのものであり、つまるところ、旅や過去に出会った諸々の「他者」を含めた、多様性のある旅の過程全体を捉えるための所作なのではないだろうか。「寒い旅」という小説は、「早春の旅情」という当初設定された目的以上のものを手に入れた「ぼく」の旅程や、それを助けた東洋的な視点に近い健康観を、物事を一つに規定しない、曖昧とも受け取れる表現や、回想といった形式を駆使することによって、その多様性を残したまま描き出した小説であるといえる。そこで展開されている作者の思考の過程は、小説中に出てきた「他者」だけでなく、「読者」にもまた開かれたものとして展開されているといえるのである。

四

前述した通り、「寒い旅」は、回想形式や曖昧な記述によって、「散文」という形式を追求した小説であることを論じた。次は、

ここで書かれた健康観が、どのように同時代的に見られていたのか、当時の医学やN先生のモデルについての記事を交えつつ、考察していきたい。そのことによつて、こういった小説が、どのように読者に受け取られてきたのか、またこの小説がどのような時代から生まれできたのか、そういったことの一端を明らかに出来たらと考えている。

まず、作者が苦しめられることになった神経痛は、どのように捉えられていたか、という点から見たい。時代を遡つて一九五六年、泰井俊三『神経痛とリウマチ』（創元社 一九五六年十一月）には、神経痛はどのように紹介されている。

神経痛とリウマチは、なかなか複雑な病気であるが、その中心となるのは、私たちの体質である。今日の医学では、細菌で起るものは、病理もくわしくわかり、よく手あてができて、ほぼ充分に治るようになったのであるが、問題は体質病といわれる一連の病気であつて、例えば、喘息、高血圧、胃潰瘍、糖尿病などがそれであり、神経痛やリウマチも、この仲間入りをしている。これらの治療は、くすりは、あまりたよらず、食物や一般の養生に気をつけ、特に予防が大事なものは共通している。

神経痛の中心であるのは「私たちの体質であり」その治療は「くすりはあまりたよらず」「予防が大事なのは共通」してゐるとされる。ここで言われる「体質病」とは、慢性病のことであり、そういったものに対して、「くすり」に頼るよりは「食物や一般の養生」に気をつけるべきだ、と紹介されているのである。このように、一九五〇年代後半から、薬で治らない慢性病がにわか

注目されるようになる訳だが、その治療法として、民間療法・東洋医学などに対する言及もまた目立つようになっていく。

同じく一九五六年に出版された田多井吉之介『ストレス——近代社会と健康生活』（創元社 一九五六年十月）では、安静療法やショック療法などの西洋医学における「非特異療法」が行われてきた点を紹介しつつ「いっぽう東洋においては、古くから針灸療法という非特異的な治療法が医術の座をしめ、今日においてもなお大衆の支持をうるばかりか、少数ながら西欧へも進出しているほど」であり、それらの治療を求める患者が「慢性疾患であることも決して見逃せない事実である。」と述べる。それらが患者の「買いあさり」、直らない故に様々な治療法に頼る傾向によるものであることを留意しつつも「信頼できる施設では、カルテも正確にとつており、他の手段ではなかなか治らなかつた治らなかつた症状が、それによって明らかに良くなった例もかなり見いだされる」と、「古くからの伝統を受けついで、いまだに大衆から支持されている」ものとして東洋医学や民間療法を紹介しているのである。

このように、大衆に親しまれた民間療法や東洋医学が、妥当性をもつたものとして公的に認知されてきたことが伺える訳なのだが、一九六〇年代に入るとよりそういったものを評価する動きが強まっていく。そして重要なのが、その中の言説で、西洋医学のアンチテーゼとして、また西洋医学を補完するものとして、東洋医学や民間療法を評価する視点が散見される点だろう。

長濱善夫『東洋医学概説』（創元社 一九六一年六月）では、「西洋医学を基幹として発達してきた近代医学は、近年になって

幾多の弱点を露呈し、あらゆる面で反省すべき曲がりかどに達している」とされ、その反省や近代医学の新しい面を切り開くために、東洋医学を再認識しよう、という目的から出版された、と序文に書いている。また、この時期は著名な整体師だった橋本敬三も医療雑誌に投稿していた時期とも重なりあう。「東洋医学の物療」（一九六〇年七月『医療芸術』第四巻七号）では、「西洋医学はこの生活現象そのものの研究にはくわしい」が、「運動機能や精神作用と生活現象との関連」などに対する研究がゼロであり、そういった生活と病の関連については、「後者は宗教家が研究と実践との指導権を握っている（クリスチャン・サイエンス、生長の家）前者は民間の非医者がその応用実践力を持っている。（カイロプラクチック、指圧、按摩、鍼灸）」と民間療法を評価しており、東洋医学を学ぶことで「運動系というものが生命現象と重大な関連性があるということを知った」と結論づけているのである。この後、橋本は整体法というものを創案し、それを施行していくことになる訳なのだが、このように「寒い旅」で展開された健康観と共通する考え方は、同時代的にいくつか散見されるのである。そして、「寒い旅」において行われてきた、体操など身体動作によって、慢性医療を治すという治療法についてもまた、他に類似例を挙げるができる。

『身体均整の科学—ボディ・メカニクス（人体力学）に準拠せる 百万人のトレーニング「矯正体育」』（新星出版社 一九六一年一月）もそういった「体操法」を紹介する本のひとつであるが、その中でも、西洋医学と東洋医学が対比的に扱われている。

「西洋の分析科学的な頭をもって東洋の全体的な宇宙観」を捉え

るのは間違いであり、「西洋の分析的に、唯物論的に事物を観察せんとする学問にもはや限度がきて、今度はむしろ弁証法的に、全体的に事象を把握しようとする態度」が、欧米の東洋熱について説明している。矢数道明「明治以降漢洋両医学の対立と交流の変遷について」(『日本東洋医学会誌』一九六九年十月)によれば、「昭和31年に産経新聞主催、歩みよる東西医学」東西医学者8名座談会、東西医学の歩みよるを語る。」「昭和32年中央公論主催、東西医学者による薬の座談会」と新聞社や雑誌社主催による東洋西洋の医学者が両雄並び立つて議論する座談会が企画されており、そういった点を含めても、「寒い旅」において描かれる健康観がこのような東洋医学の再評価の流れを汲んだものであり、それが同時代の読者にある程度の妥当性をもって受け入れられてきた、ということはあるであろう。

「寒い旅」と同時期の新聞記事においても、例えば一九六七年六月一八日付けの『読売新聞』を開けば「現代医学は抗生物質の発見が端的に示すように、外部からの原因による病氣―ことに急性の病氣や細菌性伝染病に対しては非常に進歩している。その反面、神経痛、リウマチ、高血圧など、からだの内部からの病氣の場合は、なかなかはかがいけない面もみられる。このような長期間にわたる健康障害、つまり慢性疾患には、からだ全体の自然治癒力を増進させるハリ・キユウが効果的」とあり、民間療法・東洋医学は同時代的に評価されていたことを伺い知ることができ

る。そして、劇中のN先生のモデルであろう人物、野口晴哉もこういった時代の流れの中に位置づけられることができる人物だといえ

る。伊藤桂一は一九六二年頃過労で倒れ、その後から整体操法を受けはじめている^③。その師を野口晴哉といい、実際伊藤は彼の著作の解説を書き、また多く言及や記事で彼の操法を紹介している。野口晴哉「整体入門―正しい健康を生みだす秘訣」(東都書房一九六八年)の解説では、「私は数年前、心身の過労で倒れて以来、自身の体質改善を行うについて、野口先生と操法と理論だけを信じてきた。どう考えても、これ以上の方法があるとは思えなかったからである。」と述べており、その健康観が野口のそれに強い影響を受けていることは否定できない。その点をふまえれば野口の著作に先立ってその思想を紹介したテキストとして「寒い旅」を捉える読みも可能なのかもしれない。

しかしながら、今まで論じてきた通り、連想や回想といった形で作者の思想が語られる「寒い旅」の形式は、何か一つの思想に留まり、物事を規定する、ということ回避しているといえよう。そして、「微妙な均衡のなかに、身を持って行かなければならない」と語られるように、「ぼく」は人の思想に共鳴しつつも、そこにある程度距離を置いて自身の思考を巡らせているといえるだろう。そして、その結実こそが「寒い旅」というテキストであるといえ、そうである以上、野口の思想の紹介、という面のみで「寒い旅」を評価してはならないだろう。

東洋医学・民間療法の「全体的に事象を把握しようとする態度」を、小説の語りの中で表現したという点において、「寒い旅」というテキストの独自性を、時代を映し出すテキストとしての価値を見出すことが出来るのである。

注

(1) 橋本敬三自身は『からだの設計にミスはない 操体の原理』(柏樹社 一九七八年十月)の中でこのように回想している。「戦後ソ連に抑留され、昭和二十三年に帰還した。帰還後の三年間、私はじっと現代医学界の情勢をみていました。当時、サルファ剤やペニシリンなどをのりこえて抗生物質が外敵に対する威力を発揮して注目の的であったが、疾病現象そのものについての研究は誰も目新しい発表をしていないよ
うなので、昭和二十六年あたりから、日本医事新報その他の雑誌に書き始めた」が「私はからだの基礎構造生理と医療との関連について、各誌に書きまくったが、肝心の現代医学界からの反応はほとんどなかった。」としている。

(2) ただし、野口晴哉自身は、自らの身体操法が「東洋医学」の枠組みに入らない、と定義しているという点については留意しておきたい。週刊現代の記事「上流夫人を魅了する『奇跡の指』の男―難病を治しスタミナ回復を約束する野口式整体術」(講談社 一九六七年九月)において、インタビューに答えた野口は自身の操法を「私の研究している整体は、東洋医学でも西洋医学でもない。いわば体育のようなものである」と定義している。

ただし、そういった野口全体の位置づけを決めることが主眼ではない。あくまで本論が重視したいのは、伊藤が西洋医学のアンチテーゼとして「N先生」の操法を捉えている点と、「寒い旅」の中で展開される「N先生」の健康観をある程度受け入れるだけの下地が、当時の同時代読者にあった、

という点の二点である。

(3) 伊藤桂一『静かなノモンハン』(講談社 二〇〇五年七月)所収の年譜を参照している。また、大村彦次郎『文壇挽歌物語』(筑摩書房、二〇〇一年五月)によれば、直木賞受賞時の「伊藤の軀は近年不調で、神経性胃炎の発作に始終苦しめられ」ており、「ジャーナリズムの渦中に身を置いたら、力たちまち尽きて倒れるのではないか」と心配されるほど、体調を崩していたようである。

本稿は、立教大学の日本文学演習6Bでの発表を基にしている。発表時に受けた発言と、同じく発表者である後藤潤氏の発表に多大な示唆を受けており、感謝の意を表する意味でここに附記しておく。
(おびつようたるう 大学院後期課程在學生)